

# 歴史的建造物の地域に合わせた活用と 広場のデザイン

1180097 多富 愛夏

指導教員 重山 陽一郎

高知工科大学 システム工学群 建築都市デザイン専攻

## 1. 背景

歴史的建造物というのは存在するだけでその地域を表す顔となる、地域が所有し守るべき財産である。歴史的建造物が保有する歴史的価値の向上、市民の愛着などが地域のアイデンティティの確保や地域の活性化にもつながる。しかし近年、過度な建造物の観光地化による周辺環境の悪化や歴史的背景を無視した改築による歴史的価値の損失などが懸念されている。

## 2. 目的

建造物の保有する歴史的価値や土地の条件などによってその活用方法は様々だが、今回は意図的に選択した歴史的建造物の転用、改築を通して建造物の保全と開発のバランスを計りながら市民の愛着と関心を生む空間のデザインに取り組むことで歴史的建造物の活用についてより深く考える。

## 3. 対象建造物

### 3-1. 対象建造物概要

改修対象とする建造物はスペイン、バレンシアの市街中心に位置するバレンシア闘牛場である。1850年代の建設以来、街のランドマークとして市民や観光客に親しまれている。市民の闘牛への関心の低下、カタルーニャ州をはじめとするスペイン各地での闘牛禁止の影響を受け、将来闘牛場としての用途を失うと考えられるため新しい活用の提案が必要である。



写真1. 闘牛場外観

### 3-2. バレンシアの気候特性

バレンシアは高知県に比べ冬は暖かく降水量も年間を通してかなり少ない。一方夏場は高知のように日中の気温は高くなるが湿度が低く、夜には気温が大幅に下がる。一日を通して屋外でも過ごしやすく、市民が広場やカフェのテラスで過ごす時間が多い。

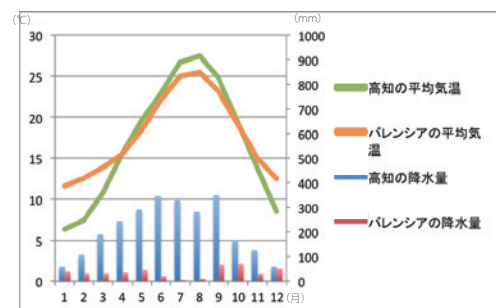


図1. 高知県とバレンシアの年間平均気温と降水量



写真2. 屋外で過ごすバレンシア市民

### 3-3. 周辺現況

対象となる建造物は主要鉄道駅のすぐ東に位置し大通りに面して建っているためアクセスが良い。そのため休日は市民の待ち合わせ場所の目印として利用され、建物周辺で人のにぎわいが見られる。

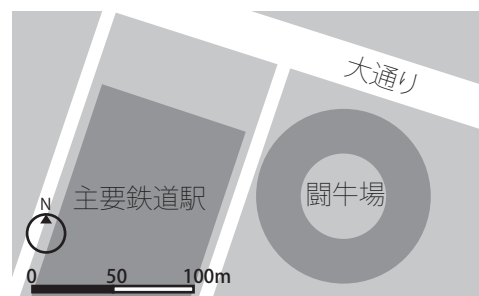


図2. 闘牛場周辺

## 4. 設計方針

### 4-1. 歴史的建造物の活用

闘牛場の一部を改築し市民の集う“広場”とショップとカフェレストランを併設した闘牛に関する“博物館”へと転用する。図(A)が広場、図(B)が博物館に対応する範囲となる。

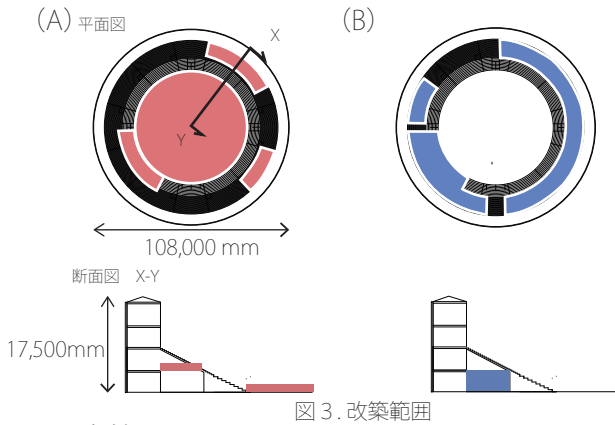


図3. 改築範囲

### 4-2. 方針

広場の設計と改築にあたり以下の3点を方針とする。

- 1). カミロ・ジッテによる「広場の造形」の5原則に沿う
- 2). 地域や対象建造物の背景や要素をデザインの随所に取り入れる
- 3). 既存の改築事例を参考に保存と改築のバランスを計る

## 5. 設計内容

### 5-1. 広場の設計

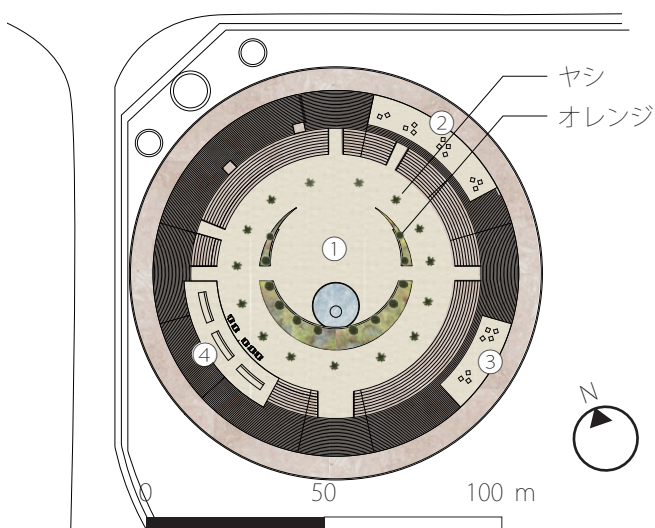


図4. 広場平面図

まずカミロ・ジッテが優れた広場の条件として提示した以下の5原則を満たす広場の設計に取り組んだ。

- I. “広場の中央を自由にしておくこと”<sup>1)</sup>
- II. “閉ざされた空間としての広場”<sup>2)</sup>
- III. “広場の大きさと形”<sup>3)</sup>
- IV. “古い広場の不規則な形”<sup>4)</sup>
- V. “広場群”<sup>5)</sup>

### I. 広場の中央を自由にしておくこと

モニュメントと噴水を南に配置し自由にした中央スペースを囲うように盛土し植栽を行った。搬入口である南側にかけて徐々に高くすることで広場の裏を強調し北側入り口の正面性を高めた。



図5. 北側入り口から広場を見る

### II. 閉ざされた空間としての広場

この条件は建造物の形状により既に満たされているため新たに手は加えない。道から外れ円形に閉ざされることにより人の流れが場に留まりやすくなり、にぎわいが生まれる。

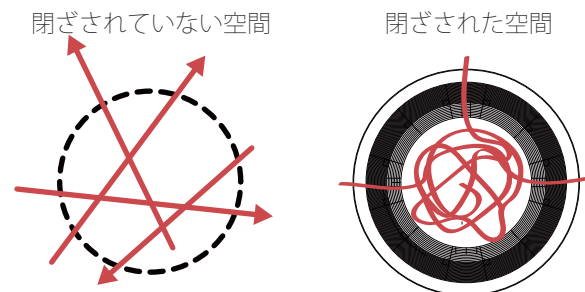


図6. 動線イメージ比較図

### III. 広場の大きさと形

主景となる噴水とモニュメントを取り囲む形にすることで広場のどこにいても視線が主景へと向き居場所を確認することができる。また広場の大きさに対してモニュメントが威圧的にならずに存在を主張するように配慮した。

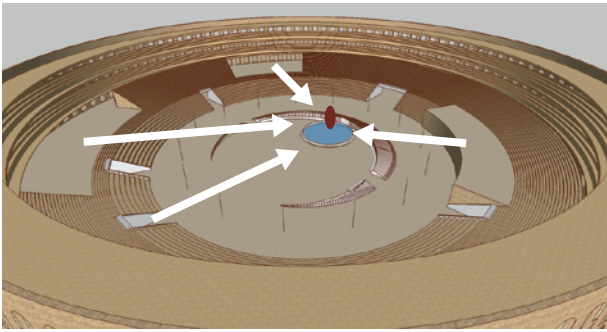


図7. 広場のボリューム

### IV. 古い広場の不規則な形

意図的に配置された三カ所の扇形のオープンスペースが単調な階段に凹凸を生み、一見左右対称に見える広場に不規則な要素を加えた。広場内の景色にも変化を与える。

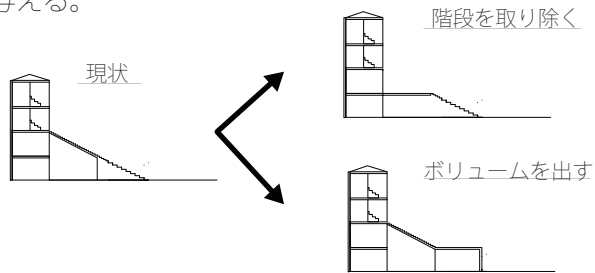


図8. 広場の凹凸

### V. 広場群

この広場はリングと客席部分三カ所の計四つの広場の群により成り立っている。レベルと大きさの違う広場が来訪者に多様な居場所と豊かな時間を提供する。



図9. 平面図③の広場



図10. 平面図④の広場

### 5-2. 地域の要素

広場の中央南にはバレンシアの無形文化遺産である“水裁判”や地中海に面した“海岸線”を想起させる噴水を配置し、その中心にスペイン三大祭りに数えられる伝統の“火祭り”や“闘牛士の闘志”を表す火をモチーフにした約4mのモニュメントを据え付ける。これが広場の主景、シンボルとなり、くつろぐ人々の視線方向を定める。

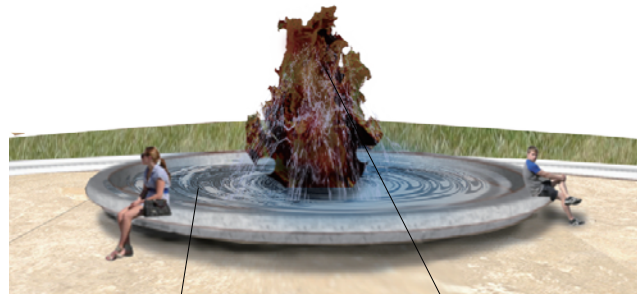


図11. 噴水とモニュメント



写真3. バレンシアのビーチ



写真4. 火祭りの様子

盛土部分には芝生を敷き、樹木はバレンシア内で多く見られるオレンジ(高さ3m)、ヤシの木(高さ5m)を主に植樹する。高さの異なる樹木を用いることで広場の立体感が強調される。木の根元に寄せ植えた地中海性気候原産の色鮮やかな植物も訪れる人の目を楽しませる。



図12. 地域に合わせた豊かな植栽

床舗装の色と素材はバレンシア市街地で見られるタイルに近づけ、広場が街の延長として意識できるようにした。

### 5-3. 博物館の設計

今回の設計にあたって歴史的建造物の改築事例を収集し、その評価を行った結果、用途を変えながらも街のランドマークとして広く知られており市民にも長く親しまれている歴史的建造物の事例には以下のような共通点が見られた。

- ・ 建造物の外観には手を加えない
- ・ 改築部分と保存部分の切り替えに違和感がない
- ・ 歴史や文化を意識した転用を行なう

この3点を意識しながら博物館の設計を行なった。

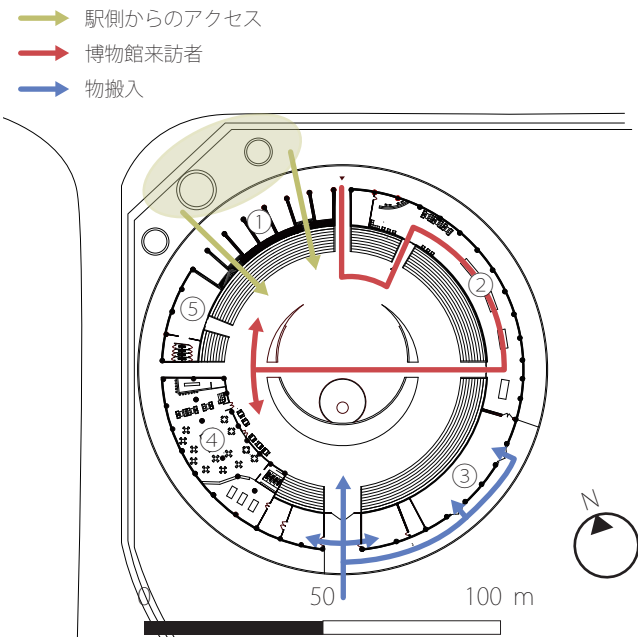


図13. 1階平面図

#### ①保存部分

北側入り口を經由せず直接二階部分へつながる階段やトイレを納める北西一階一部は保存する。現状は閉め切られているが、闘牛場と鉄道駅をつなぐオープンスペースへ開放することで駅からのアクセスを促す。

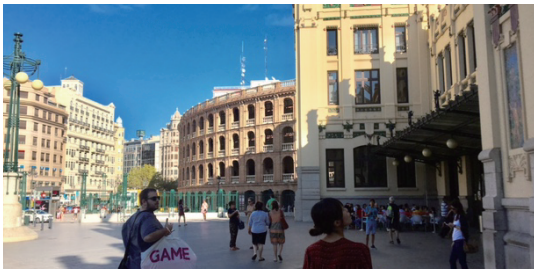


写真5. 駅を出て闘牛場をみる

#### ①博物館

東一階に位置する博物館では闘牛の歴史や衣装、武器などを展示する。闘牛場の各所で見られる連続した緩やかなアーチを取り入れることで改築部分の印象が現存する部分からかけ離れないように配慮した。



写真6. 改築前



図14. 改築後イメージ

#### ②保管庫

博物館南側に位置する保管室は北側搬入口へつながっており、博物館の資料をはじめ、年に一度の祝祭で使用される道具や使用機材を管理する。搬入口は闘牛場西側にあるカフェレストランの倉庫へもつながっており、物流がスムーズである。

#### ③カフェレストラン ④ミュージアムショップ

搬入口は闘牛場西側にあるカフェレストランの倉庫へもつながっており、物流がスムーズである。博物館を出た後は西側カフェレストランや関連商品を取り扱うミュージアムショップを訪れたり広場や建物内を回遊したりと各々が自由な時間を過ごすことができる。

### 6. 参考事例

倉敷アイビースクエア、横浜赤レンガ倉庫、バルセロナ闘牛場、パリルーブル美術館、ヴェネチア現代美術館、ニューヨークハイライン 他

### 7. 参考文献

- 1) C・ジッテ著、大石敏雄訳『広場の造形』鹿島出版会 1983年 p31
- 2) 前掲 『広場の造形』 p45
- 3) 前掲 『広場の造形』 p55
- 4) 前掲 『広場の造形』 p65
- 5) 前掲 『広場の造形』 p73